俳句との出会いとご縁（一）

木藤隆雄

今から十年以上前、山頭火没後七十年のラジオシンポジウムの司会を担当した。

一緒に出演した山頭火研究家の藤岡照房さんは、お父様が山頭火の世話をしていた関係で、子どもの頃、山頭火本人に会っている。番組では、山頭火と一緒に家の縁側でスイカを食べた思い出を語ってくれた。山頭火はその頃かなり歯を失っており、歯と歯の隙間から庭に向かって器用に種を飛ばしていたという。何ともユーモラスな光景である。山頭火は、歯に関していくつか俳句を残している。

ほろりとぬけた歯ではある　（49 歳）

ぬけさうな歯を持って旅にをる　（50 歳）

ぬけるだけはぬけてしまうて歯のない初夏　（53 歳）

これらの句には、歯がだんだん少なくなってくるという悲壮感はあまり感じられず、むしろ事実を客観視しているところが凄いと思う。そして、山頭火は、亡くなる二年前の昭和十三年、五十六歳で歯を全部失ってしまった。

もう一つ忘れられない思い出がある。生放送中、私はスタジオの雰囲気を和ませようと、所謂おやじギャグを披露した。すると、右隣に座っていた夏井いつきさんから、即座に「しょーもな」という言葉が返ってきた。この言葉にスタジオ一同大爆笑。番組は、とてもいい雰囲気で進行していった。

夏井さんは有季定型の俳句と、自由律の俳句について、分かりやすく説明して下さった。自由律の句は苦手だったが、心の内を正直に詠んでいる山頭火の句に接しているうちに、だんだん自由律俳句が好きになっていった。

そして、この放送を聴いていた愛媛大学の清水史教授から、後日、西条市の文学講座で山頭火について喋ってほしいと頼まれ、西条市とのご縁が出来た。以来、

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

十年近く毎年西条市に行き、山頭火の他、子規や漱石の俳句についても語った。

漱石の句は、実に変化に富んでいる。

生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉

修善寺で一時生死の境をさまよった後、幸いにも回復した際に詠んだこの句には、素直に、生きる喜びが表現されている。

時鳥厠半ばに出かねたり

この句は、時の総理大臣西園寺公望から文士招待会の案内状を貰ったものの断った折に書き添えた句である。総理大臣に宛てた俳句に厠とは、如何にも漱石らしい。風流な「時鳥」という言葉と、俗っぽい「厠」という言葉を五七五の中に並べたのも、俳句ならではの面白さかと思う。

ラジオ番組をきっかけに、色々な俳句に接するようになって思うことは、俳句というものは実に幅広い間口を持ち、奥が深いという事である。そして、その中でも私は滑稽俳句が大好きである。厳密な定義はさておき、ふっと笑える句が滑稽俳句だと思っている。

青蛙おのれもペンキぬりたてか　　芥川龍之介

終生を夜勤に励み油虫　　八木健

今の厳しい世の中、ふっと笑えることは少ない。

だからこそ、滑稽俳句に接して、ひと時、幸せな気分に浸りたいと思う。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。